

1. 英語科の目指すもの

GNOBLE は進学塾ですから、生徒の皆様の志望大学合格のお役に立てることが存在意義だと心得ています。ただし、大学に受ければそれだけでよい、とは考えておりません。「英語力」の向上が結果的に志望大学の合格に結びつく、というのが、我々の信念です。

一昔前までは、受験英語と実用英語は別のもので、と捉えられることが多かったと思いますが、最近の大学入試の問題では、実用英語検定や、TOEIC、TOEFL で問われていることとの違いがますますなくなってきました。例えばセンター試験の英語の問題は、英検の準 2 級～2 級の問題と、出題形式や出題される事項がとても似ていますし、国公立か私立かを問わず、重箱の隅をつつくような知識を問う問題は減り、英文の中から素早く必要な情報を読み取らせる問題が増えています。一方で、国公立の大学を中心に、下線部和訳や和文英訳の問題を出し続けている大学も多いのですが、暗号を解読するように訳させる出題は少なくなり、大学で英語の文献を読んだり、英語で自分の考えを伝えることができる力を問う問題に変わってきています。

大学入試で要求される英語力は、最難関といわれる大学でもせいぜい TOEIC のスコアで 700 台、英検では準 1 級に合格できるくらいのレベルです。海外経験なしでアルファベットからスタートしても、5 年程度で十分に獲得可能な英語力ですから、正しい方法で地道に学習を続けていくことが肝要です。

ただし、英語力だけあれば大学入試の問題が解けるわけではありません。設問の指示が日本語で書かれていたり、解答を日本語で書くことが要求されたりすることもあります。よって、「英語と日本語という全く異なる言語の橋渡しができる力」が必要になります。

更に、東京大学などで出題されている要約問題や段落整序問題に答えるには、書かれていることを正確に読み取った上で、それを自分の言葉でまとめ直す力や、論理を正確に構成していく力も問われます。これらの力は換言すれば、「大学で高等教育を受け、専門的な研究をするに足る力」です。大学によっては、英語の出題でこのような学力を問うところもあります。

GNOBLE 英語科は、上記の、「英語力」「英語と日本語の橋渡しをする能力」「大学教育を受けるに足る学力」を、受講していただいている方に身につけていただけるよう、これからも最善を尽くして参ります。

2. 英語力とは何か

GNOBLE では、高 1 までは専ら「英語力」を高めることに主眼を置いた指導をしていますので、ここで「英語力」についてまとめてみます。

英語力は一般的に、読む力・書く力・話す力・聞く力の 4 つに分けて考えられます。英語力を高めるとは、これらの 4 つの力を高めることと同義です。英語の教育機関に必須なのは、何を・どうやって・どの時期に・どれくらいの時間をかけて指導すれば 4 つの力を高めることができるのかに対する見通しと、その反映であるカリキュラム・教材・指導方法を持っていることです。

英語力を以下のように捉え直してみます。

英語力 = 受信する力 + 発信する力

受信する力 = ①読む力 + ②聞く力

①読む力 [読解力] = 文法力 + 語彙力

②聞く力 = 読解力 + 英語の音を聞き取る力*

*読んでわからない英文を、聞いたら理解できるということはありません。

発信する力 = ③書く力 + ④話す力

③書く力 [作文力] = 文法力 + 語彙力

④話す力 = 作文力 + 英語の音を発声する力**

**時間をかけて書き表せない英文が、瞬時に口から出てくることはありません。

受信する力よりも発信する力の方が上位の能力です。受信できなければ、発信もできない、言い換えれば、input されていない英語が output されることは決してないということです。また今のところ、TOEIC では①②が、TOEFL や大学入試では①②③が、実用英語検定では①②③④が問われています。

これをさらに簡略化すると、下図のようになります。

英語力 = 読解力 + 英語の音を聞き取る力・発声する力 + 作文力

文法力

語彙力

まとめますと、英語力を高めるには、音声を介在させながら読解力と作文力を高める努力を意識的に行うことが大切で、それを支える車の両輪として文法力と語彙力をバランスよく発達させていかなければならない、ということです。

3. 分野別指導理念

以上のような考え方に基づく GNOBLE の英語指導を、具体的に「力」ごとに説明します。

▼文法力

中 1 から高 2 まで、どのクラスでも文法単元別のテキストを学習しています。通常授業では、小チームごとに一冊の文法テキストを学習します。

中 2 の夏前に学習指導要領の中学校範囲は修了し、既習事項を復習しながら高校範囲へ踏み込んでいきます。高校英語の要となる文法単元は中 3 で全て学習します。中学生の文法テキストの基本例文 [Sentences for Workout] は、全て GSL 対応です(後述)。

高 1 で高校範囲の主要文法事項を全て学習し終えたあと、高 2 で同じ範囲をさらに深めながら繰り返します。文法法則の理解を常に重視しながら、同じ文法単元を繰り返し学習し、深く掘り下げていきます。

▼語彙力

語彙は自然に増やしていくのが望ましいと考えています。もちろん、不規則動詞の活用のように早い時期に覚えてしまった方が、その後の学習に役立つものもあり、それに関しては範囲を指定して翌週の授業で小テストを課しています。しかし、大学入試の題材を扱い始める中 3 から、扱う語彙の難度が上がり、数も増えます。この時期からは丸暗記する学習では効率が悪くなります。

一例を挙げます。以下の単語を、①のように日本語訳との一対一対応で丸暗記するやり方と、②のように語根から成り立ちを理解して他の語と関連付けて覚えていくやり方では、どちらがよいでしょうか。

- ① express 表現する; 急行便 / impress 印象付ける / depress 押し下げる / compress 圧縮する / oppress 服従させる
- ② **press** 押す // express = ex 外へ + **press** (感情を外へ出す = 表現する; 目的地へ向けて押し出す = 急行便) / impress = im<on 上に + **press** (上に押し付ける = 印象付ける) / depress = de 下に + **press** (押し下げる) / compress = com 共に + **press** (一緒に押す = 圧縮する) / oppress = op<against に対して + **press** (力で押し付ける = 服従させる)

いかがでしょうか。①は日本語訳を丸覚えすること自体が大変ですし、理解を伴わずに暗記したことは忘れやすいものです。それに対して②は記憶に定着しやすいというだけでなく、後に suppress に初めて出会ったときに、意味を推測する手懸りとなります。

GNOBLE では理解させたほうが定着も早し、応用も利くと思われるものに関しては、徹底的に語根や成り立ちにこだわって指導しています。

▼読解力

おおむね中 2 までは文法学習が中心ですが、中 3 からは文法と読解がほぼ半々の割合、高校生になるとテキストを Grammar & Writing(文法と英作)と Reading & Listening(読解と聴解)に分冊し、読解に軸足が移行します。高 1 と高 2 の Reading & Listening テキストの長文は、GSL 対応です(後述)。中 2 から、毎回宿題として長文問題を読み解いてきてもらう他、授業中にプリントでの演習もおこなっています。

英文を読む際には、「表現の持つ意味の単位で区切って、前から読んでいく[後ろから前へひっくり返る、いわゆる返り読みをしない]」ように指導しています。文法力がないと英文を意味の単位で区切ることができませんし、学年が上がり文構造が複雑になるにつれ、単語の意味をフィーリングで組み合わせるだけでは英文が読めなくなります。

▼作文力

全学年、文法テキストには英作文の問題があります。高 1 まではクラスによって、高 2 は全てのクラスで英作文の課題プリントを定期的に配付して翌週提出してもらい、担当講師が添削後、返却しています。高 3 からは授業そのものを「読解(2 時間)」と「英作文(2 時間)」の二つに分け、毎週英作文を添削指導するようになります。

sentence(文)が書けるという段階から、最終的には paragraph(段落)構成を意識しつつ自由英作文が書けるレベルへと、時間をかけて引き上げていきます。

▼英語の音を聞き取る力・発声する力

GNOBLE の授業では講師が生徒に発問し、考えて発言するのを促し、英語の仕組みを理解してもらうことをとても大切にしていますが、英語はコトバですから、最終的には身につけなければいけません。「理解」したことを「身につける」練習が不可欠です。その練習をするために、6 学年全てに GSL[GNOBLE Sound Laboratory=グノーブルの音声による演習]という音声教材を導入しています。中学生は文法テキストの基本例文[Sentences for Workout]の音声を、高校生は長文の音声を、ウェブサイトで配信しています。

中学生には、「Sentences for Workout の基本例文を何度も聴いて音読し、暗唱できるくらい親しんでくる」という宿題を全学年・全クラスで課しています。翌週の授業の最後にその中から 3 本の英文を放送して書き取らせ、定着度を確認します。これによって英語の音を聞き取る力がついていくだけでなく、理解できたことが身につく、語彙も自然に増えていきます。

高校生には長文の音声を配信し、授業で解説を聞いたのでしっかりと理解できている長文を繰り返し聞き、何度も音読するように指導しています。音読すると返り読みができないので、英文の意味を前からカタマリごとに捉えていくことができるようになります。このやり方でスラスラ音読できる長文を一つ一つ増やしていくことがとても大切です。これを継続していくと、初見の長文でもかなりのスピードで読めるようになる段階が必ず訪れます。

4. ご家庭での英語学習について

GNOBLE 英語科では、中 1 から高 3 の全てのクラスで毎週一定量の宿題を出しています。問題を解いたり、提出する英作文を書いたりといった宿題には、毎週取り組んでいただかなければなりません。これをやらずにただ授業に参加しているだけでは、英語力の向上は望めません。

上記の宿題をしっかりとやるのは最低限のことで、真に英語力が伸びるかどうかの分かれ目は、実はこれから述べるワークアウト[復習のためのトレーニング]を継続して行うことにかかっています。生徒の皆さんには繰り返し指導していることですが、保護者の皆様のご理解をいただけますよう、ここにまとめておきます。

▼**中学生のワークアウト**: ターム毎に配付するテキストの巻頭に記してある以下の勉強方法を、中 3 まで継続して行ってください。それで英語の基礎力は万全になります。

—— 授業で「理解」したことを「身につける」ための具体的なトレーニング[Workout] ——

- ① **Listening**[聴き込み]: 授業で理解した例文を、テキストを見ないで繰り返し聴く(回数は全ての文が完全に聴き取れるまで)。電車の中での時間も利用する。
- ② **Retention/Shadowing**[口まね]: **Retention** は、英文一本を丸ごと聴き取った後で、まねて発声する練習方法。**Shadowing** は、聞こえた英語をすぐさままねて発声する。
- ③ **Reading aloud**[音読]: ②の Workout で耳に残っている音を利用して、テキストを見ながら一文を音読する。目安は一文につき 5 回。
- ④ **Recitation**[暗唱]: ③の Workout の後すぐに、テキストは見ないで声を出して暗唱する。目安は一文につき 10 回。
- ⑤ **Dictation**[書き取り]: ④が終わった後、日を改めて行う。英文一本が流れ終わったら、丸ごと書き取る。書き取ったものをテキストと照合して、つづりの間違いなどがいないかを確認する。

以上の Workout が終わったあとで、宿題として出されているテキストの問題を解いてください。必要なことが頭に入っているので、スラスラと解けるはずです。

▼**高校生のワークアウト**: 高1と高2の間は読解問題に関して、以下のワークアウトを継続して行ってください。

- ① **Listening**[聴き込み]: 授業で理解した GSL 対応の長文を題材にする。
 1. 音声を聞きながら、意味を意識しつつ目で英文を追いかける。慣れるまで繰り返す。
 2. 意味を意識しながら、繰り返し音声を聞く。(以上は電車の中での時間も利用する。)
 3. 音声を聞き、目で英文を追いかけ、まねして声を出す。口がうまく回るまで繰り返す。いずれの場合も、意味の切れ目を意識し、切れ目ごとに意味をイメージする。
- ② **Reading aloud**[音読]: 授業で理解した長文を題材にする(GSL 対応でなくてもよい)。

スラスラ読めるようになるまで音読する。目安は最低 10 回。

音読の効用は、具体的には以下の三点です。

1. 声に出して読むと左から右にしか読んでいけない[右から左へのいわゆる「返り読み」ができない]ので、英文の情報を「表現の持つ意味の単位で区切って、出てくる順番に頭の中に入れる」ことができるようになる。＝ **1 回読んだだけでわかる力がつく!**
2. 声に出して読むと日本語に置き換えることができないので、英文の意味を英語のまま捉えられるようになる。＝ **速く読める力がつく!**
3. 「目」だけでなく「口」と「耳」も使っているため、文法・語法・語彙が記憶に残りやすくなる。
＝ **英語力そのものが向上する!**

以上